

雛の館－資料 1 1

次郎左衛門雛（国井家蔵）



京都の人形師、雛屋次郎左衛門が江戸時代の宝暦頃に幕府の御用をつとめて、江戸に下向することになります。江戸川柳に「きめのいい団子に目鼻、次郎左衛門」と詠まれ18世紀前半におおいに流行します。本品は大ぶりですが女雛の緋袴（ひはかま）は後世に修理の跡がうかがえます。男雛47cm、女雛42cm。

明治雛（林家蔵）



この雛は、明治30年代に製作されたもので、この手のものを明治雛と称しています。

古今雛を祖型とするこの雛の男雛は、雲立涌紋で宮家の束帯（そくたい）に忠実な織をなしています。女雛

の五衣は、鶴亀を基調に金糸で唐草紋を刺繍し豪華に仕立て、天冠（てんかん）を別造りに冠卓に置く優雅な内裏雛（だいらびな）です。男雛40cm。

随臣（ずいしん）（竹谷家蔵）



随臣も江戸の中頃より、添雛として雛段に登場します。本品の装束（しょうぞく）は、蛮地の袍（しょうじ）と言ひ、享保の影響を受け、優れた金襴地（きんらんじ）を用いています。台座は木製の箱形に漆塗り、虎皮は胡粉（ごふん）で描かれている見事な作品です。

台共46cm。

享保雛（小林家蔵）



本品は享保前期の作で、元禄雛の影響を色濃く残しています。男雛は束帯（そく

たい）、女雛は五衣・唐衣着用袴は紅平絹で綿をもってふくらませています。

男雛31.5cm、女雛23.5cm。

女官狛曳き（須藤家蔵）



大腰袴の女官が座敷犬の狛を曳いている姿で、明治から昭和の初めまで雛人形に添えて飾られたものです。日本古来の犬種「狛」が上流で好まれ、安産と健やかな成長の願いをかけ、当時好んで飾られたようです。昭和初期 女官29cm。

享保雛（国井家蔵）



雛の黄金時代とも言える享保時代に作られた「ひな」を享保雛と称しています。男雛の袖が左右にぴんと張り、装束（しょうぞく）は紺

雛の館－資料 1 1

地金襴を使い、金色の冠をつけている。女雛は五衣、唐衣(からぎぬ)は男雛と共裂(ともきれ)で作られています。袴は紅平絹で丸くふくらみを見せています。享保6年(1721)の寸法制限の御触書が発せられたのちの作品と思われます。

男雛 39 cm、女雛 31 cm。

五人ばやし (河北町紅花資料館蔵)



右から言うと、地謡(じうたい)・笛・小鼓・大鼓・太鼓の順です。

衣裳は小袖(こそで)が紅縮緬(べにちりめん)に金糸(きんし)縫取りに金襴(きんらん)の袴(かみしも)を着し侍鳥帽子を頭上に冠している江戸後期の作品かと思われます。顔の表情は、それぞれ異なりお囃しの雰囲気が出てきます。

高さ 34 cm。

享保雛 (河北町紅花資料館蔵)



享保雛は江戸中期、八代将軍吉宗時代初当の作で、町家の豪商あたりで飾られていました。金襴地(きんらんじ)や錦地の裂地(きれじ)でつくられた装束(しょうぞく)は、豪華絢爛を競ったものです。享保雛では中型と言えます。

男雛 42 cm、女雛 37 cm。

有職 (小直衣 (このうし)) 雛 (国井家蔵)



享保雛は江戸中期、八代将軍吉宗時代初当の作で、町家の豪商あたりで飾られていました。金襴地(きんらんじ)や錦地の裂地(きれじ)でつくられた装束(しょうぞく)

うぞく)は、豪華絢爛を競ったものです。享保雛では中型と言えます。

男雛 42 cm、女雛 37 cm。

元禄雛 (河北町紅花資料館蔵)



元禄雛は元禄(1688～1703)時代に作られたもので、寛永雛と同様に男雛の頭(かしら)は冠と一体の木彫です。女雛の天冠(てんかん)はこの時代には無く、享保時代の頃より天冠を置くようになりました。本品の着地は金襴(きんらん)、容姿も整っていて、標準的な元禄雛と言えます。男雛 24 cm。

雛の館－資料 1 1

次郎左衛門立雛（河北町紅花資料館蔵）



京都の人形師雛屋次郎左衛門の立雛です。丸顔に引目（ひきめ）、鉤鼻（かぎばな）、おちょぼ口が特徴です。衣裳は金欄地（きんらんち）を和紙に張り、男雛の両袖は左右に張り、女雛は袖と身ごろが一緒になっています。帯を巻いている状態がつつましやかに見せています。後世、江戸に招聘され座（すわり）雛（びな）を考案し、武家社会のお雛として風靡する事になります。江戸中期 男雛 32 c m、女雛 21 c m

えられるなかで、節句飾りの復活をみたのが明治20年代頃からで、伝統的な風習が立ち直り始めました。内外国博覧会が開かれるや、伝統工芸品が花開き、お雛や雛道具も出品されました。本品も京都丸屋大木平蔵作の箱書があり、出陳した作品の一つです。男雛 40 c m。

明治雛（林重見蔵）



現代雛の祖型は、古今雛に端を発し今日に至っています。幕藩時代から明治時代へと移り、文明開化が唱